発達障害に対する理解と支援

―自閉症スペクトラム障害に視点をあてて

楠 凡之
北九州市立大学

はじめに　浩一君の新年度の抱負の作文から

「今年は、相手を怖がらせたいです。何故かというと、今まで相手に負けていたからです。そのためには、どんな手段を使ってでも勝ちたいと思います。（中略）

最近『心理学』という学問を学びたいと思いました。何故かというと、相手の心の中が読めるのですから。（中略）

負け続けた私とももうお別れ。下の子わっぱどもには手加減はしません！」

この文章はASD（自閉症スペクトラム障害）と後に診断された浩一君が中2の最初に書いた新年度の抱負の文章の一部です。

ASDの子ども・青年のなかには、浩一君のように、生来的なコミュニケーションの困難さへの適切な理解と支援がないなかで、人間関係を「敵か味方か」「上か下か」「勝つか負けるか」の二分的評価で捉えるようになってしまうことは少なくありません。

中学入学当時の浩一君の様子

浩一君は、新年度に入学してくる生徒の引き継ぎのため小学校にきた中学校の養護教諭に向かって、「何だお前は。俺のことを調べに来たな。帰れ！」といきなり突っかかり、中学校の先生をびっくりさせました。

中学校に入学して以降、浩一君は頻繁にトラブルを起こします。浩一君は教科の先生からみんなと同じ行動を要求されるたびにパニックになり、モノを投げたり、床に机を倒したりしました。休み時間には自分より体の小さい子を叩いたり、汚いことをしたりして女子に注意され、それに腹を立ててまたパニックになりました。また、掃除場所を何度説明されてもわからなくなり、泣いて廊下や教室の床に寝ころんだり、うずくまったりで、どんなに先生に叱られても動こうとしませんでした。

第6回

自閉症スペクトラム障害の二次障害の問題を考える
被害的、敵対的な認知を乗り越え、お互いを大切にしあう関係へ

くすのき　ひろゆき／1960年、大阪生まれ。専門は、いじめ、不登校、発達障害の問題に焦点をあてた臨床教育学。著書に、『保育と教育のための発達診断』（全障研出版部、共著）『自閉症スペクトラム障害の子どもへの発達援助と学級づくり』（高文研）、『いじめと児童虐待の臨床教育学』（ミネルヴァ書房）など

5月はじめの校舎外での写生大会では、風が吹いて画用紙がめくれ、絵具が予定外のところにつくたびにパニックになり、画用紙を三枚も破ってしまいました。

浩一君は授業で自分がわかると手を挙げて発表しますが、数学の難しい計算の時などはプリントをくしゃくしゃにして消しゴムや鉛筆を投げつけ、「どうせオレなんかやってもできないんだ」「高校も行くところがないんだ」と叫びます。

そんなときは他の子の目を気にして何とかしようとしても深みにはまるばかりなので、しばらく放ったらかしにして、頃合いを見計らってプリントのしわを伸ばし、ゆっくり説明すると少しは落ち着いて勉強することができました。

仲間のなかで受けとめられ、少しずつ変わっていく浩一君

ある日、浩一君は英語の時間に指示されたことができず、少しパニックになっていました。いつもなら休憩時間に気持ちを整理するのですが、その前に次の国語の授業が始まってしまい、気持ちを立て直すことができませんでした。浩一君は授業の始めのあいさつからしようとしません。それを国語の先生に注意され、感情を抑えることができなくなった浩一君は先生に暴言を吐き、物を投げつけ、図書の担当でもある先生に「図書委員も辞める」と言って図書委員のノート、さらに委員バッチもはずして投げつけてしまいました。

しかし、本が大好きな浩一君、自由に図書室に行けなくなったことがとてもショックで、すっかり落ち込んでしまい、床に座り込み、給食の準備が始まっても悪態をついて動こうとしません。

担任の上田先生は今日のことを終わりの会で学級長からみんなに説明してもらうことにしました。しかし、自分のことを言われるのが大嫌いな浩一君がこの状況に耐えられるか、とても心配でした。しかし、給食の時の学級長と上